



話題の本棚

フランコ・モレッティ著、秋草俊一郎／今井亮一／落合一樹／高橋知之訳『遠読(世界文学システム)への挑戦』
北川眞也著『アンチ・ジオポリティクス 資本と国家に抗う移動の地理学』

特集／予算1000円絶品本

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyoku/public_relations/



UNIV. 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

テキストから遠く離れて——文学研究の問題作、新装復刊

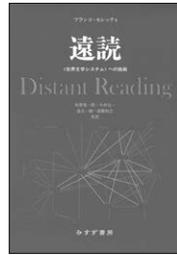
遠読

〈世界文学システム〉への挑戦

フランク・モレットイ著

秋草俊一郎／今井亮一／落合一樹／

高橋知之訳 みすず書房



シャーロック・ホームズの名前は誰しも聞いたことがあるだろう。登場から百年以上経ったいまなお読まれ、世界的に親しまれている名探偵。ホームズが存在を抜きにして推理小説を、その歴史を語ることはできない。……さて、それでは、ホームズ以外、？

ホームズと同時代、ホームズ以外にも膨大な推理小説が書かれ、たくさん名探偵が生まれた。けれどもそのほとんどは、いまとなっては忘れられている。彼らとホームズの運命を分けたのは、いったいなんだっただのだろうか？ なぜホームズが生き残ったのだろうか？ それはホームズを読むだけでは答えられない問いである。しかし本書の著者モレットイが言うように、このような問いに対して「もっと読むことは常にいいことだが、解決にはならない。」では、どうすればいいのか？

◆「精読close reading」ならぬ「遠読distant reading」

本書は比較文学者フランク・モレットイの論文集だが、その内容はいずれも文学研究と聞いて一般にイメージされるものとは一線を画すものだ。というのも、彼は精読しない。その代わりに、無数のタイトルを地図や樹形図に並べたり、タイトルそのものをデータ化して計量的に分析したりする。ネットワークを描き出し、グラフを

プロットする。それが「遠読」——文学を俯瞰的に論じる手法だ。もちろんそれは、地に足の着いた読解とは言えない。モレットイが本書で提案しているのは、ロケットを打ち上げて地球を撮ろうとするようなことだ。その眼差しは地上をあまねく平らに均し、作家や作品、あるいは言語や土地ごとの固有性を捨象しかねない（事実、訳注や解説で指摘されている通り、モレットイの非欧米文学に対する理解や論証は問題含みである）。けれども彼の眼差しは同時に、巨大なスケールで、全地球的なシステムとして文学を捉えることを可能にする。これは言わば、生態学的な文学観だ。地理、経済、そして政治と、何より読者。さまざまな要素が絡み合いながら、分岐と淘汰が進んでゆく。

◆実験としての文学研究

先ほどの問いに戻ろう。なぜホームズが生き残ったのか？ モレットイはこの問いに対して、進化論的な発想から答えようとする。はつきり言ってその見立てはかなり大雑把で胡乱だ。けれども繰り返される分岐と淘汰を現した樹形図は、いまとなつてはほとんど記憶されていない作家・作品たちを掬いあげ、ひとつの歴史への包摂を図る。この一点において、彼の試みはじゅうぶん興味深い。

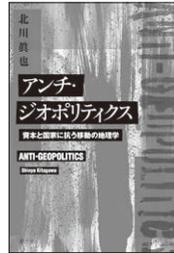
そう、試み。あるいは実験、挑戦、賭け。本書においてモレットイの理論と実践は、そんな言葉で表せるだろう。彼はその賭けに勝つたとは必ずしも言えないが、ここで模索されているのは答えではなく、問うための方法だ。だから大いに反論すれば良い。そうして思考を深め、広げてゆく。本書はその鍵となるだろう。（水炊き）

（二二〇頁 税込五〇六〇円 6月刊）

ノー・ボーダーの叫びを聞け——批判地理学の最前線

アンチ・ジオポリティクス
資本と国家に抗う
移動の地理学

北川眞也著
青土社



この頃、書店やSNS上で「地政学」という言葉を目にする機会が増えてきた。地政学を冠する一般書の多くは、ロシアとウクライナの戦争や中国の影響力の増大といった国際情勢に対して、地図を用いてその要因や展望を説明しようとする。世界に渦巻く様々な争いを地図にあてはめ、対立軸を明示するという分かり易さから、地政学は広く受け入れられているのだと思う。

いくつもの国家がヒースになって大地というパズルを埋め尽くす。一色で塗られた国家には一つの国民、一つの領土があり、誰ももがそのどれかに属することが自然であるように見える。地政学に典型的な世界認識、地図のように世界が成り立っているという認識を、著者は「地図学的理性」と呼んで批判する。領土というヒースを一色で塗りつぶすために、国家は支配や略奪といった権力を土地と身体に対して行使してきた。一方で人びとは国境を越えて移動し、国家や資本による支配や暴力に対峙して様々な闘争を繰り返している。無数の人びとがこうして、世界は変容し続けている。本書が着目するのは、こうした人びとによる移動と闘争の軌跡だ。つまり、「支配と権力の地政学」ではない、「反地政学的な視座」から、この世界の広がりや、オルタナティブな地理を描き出すのである。

地中海・ランペドゥーザ島の移民難民収容所、アテネの廃ホテルに現れた難民の自助空間、巨大インフラ開発に反対するトリノ郊外の山中、そしてアジアからの技能実習生が点在する日本の中小企業。本書が取り上げる様々な場所は、著者である地理学者・北川眞也の二〇年以上に及ぶ研究の軌跡と重なる。批判地政学、人の移動、歓待、収容所、生政治、ロジスティクス、インフラ、惑星都市化、アナキズムなど、取り扱うテーマも多岐にわたる。ゆえに本書は、不平等や格差に満ちた世界を権力から人びとの手へと解放することを目指してきた、批判地理学の現代的な展開を一望することができる。北川の視点は常に、国家や資本による略奪や搾取などの暴力に抗い、境界を移動し、叛乱する無数の人びとに向けられてきた。ランペドゥーザ島の事例では、北アフリカからヨーロッパへ向かう年間数万人もの「不法移民」を拘禁し、あるときは強制送還し、あるときは労働力商品としてイタリア国内の他の施設へと配送することで、国家への人の流れを制御し、生かしても殺しもある生権力の空間として収容所が存在することを指摘する。同時に、生権力により一方的に殺害・追放されてしまう存在（＝剥き出しの生）として「不法移民」を捉えるだけでなく、パスポートを燃やし国籍などのアイデンティティを自ら着脱することで、生権力による監視の目を振り抜けて境界を移動し、生の権利を叫ぶ彼らの主体性を北川は強調する。

自らの生を肯定しありのままの欲望を表出するノー・ボーダーの叫びが、「国家で覆われたこの世界を食い破り、地球＝大地の次元と共鳴し」、本書全体に響き渡る。その叫びを聞け。（たいやき）

（五三八頁 税込四四〇〇円 3月刊）

女生徒

太宰治著
角川文庫

「お金がない！ でも面白い本が読みたい！」そんな欲張りなあなたにこそ、近代文学をオススメしたい。はじめてこの本を手にとったとき、中身よりもまずその値段に驚いたことをよく覚えている。「1000円あれば2冊も買えるんだ！」と。



古典と呼ばれる作品の魅力は、再読に耐え得るところにある。この短編集は太宰の最も得意とする女性一人称語りの小説を集めたものののだが、「葉桜と魔笛」は桜が散るたびに、「皮膚と心」は病院の待合室にいると読み返したくなる。とりわけ表題作「女生徒」は個人的に思い入れが深く、読み返すたびにがらりと表情を変えた。

出合いは小学六年生のとき、国語の先生に勧められたのがきっかけだ。まだ「太宰治＝走れメロス」だと思っているいたいけな少女に対して、手酷い仕打ちだと思う。内容をよく理解できないまま、何となく暗鬱な気持ちになって、半分も読めずに本を閉じた。リベンを果たしたのは主人公の年齢とほど近い中学三年生のとき。「ああ、これは私のことだ」と思わせるのが太宰文学の魔力らしい。そして大学生になって読み返すと、今度は主人公を抱きしめたくなった。「なんて可愛いんだろう！」と。煽り文の「多感で透明な心情」の意味が初めて腑に落ちた。あの日の教室に置いてきた自分自身の醜態も、まるごと愛せる気がした。

この本を開くたび、私は実家の柱に身長を刻む光景が目に見え、一読では味わいきれないのが近代文学の懐の深さだ。ワンコインで生涯寄り添える本に出会えたら、お得じゃないだろうか。

(くたくた)

(288頁 税込484円)

特集

予算1000円 絶品本

世知辛い世の中になってきた。気づけばラーメンはどこも1000円前後。数年前は700円前後で食べられたはずなのに追加でチャーシューを付けた日にはもう「ラーメン屋さんでこの値段!？」と頭がショート。本の世界も例外ではない。文庫で1000円超えは当たり前。2000円超えもちらほら出てきた。これでは学生が本を買わなくなるのは当たり前……ということ。本特集では「1000円以下で買える絶品本」を集めてみた。昼飯のラーメンを抜いたら買えるお値段。昼飯代で一生モノの1冊にめぐり会えるとしたら……それはもしかするとお宝の宝かも。

(かや)



エレンディア

ガルシア＝マルケス著
鼓直／木村榮一訳 ちくま文庫

翼を持つ老人、バラの香る海、海底遺跡、幽霊船——驚異は現実には溶け込み、かつてあった話となる。さながら、現代の民話。

『百年の孤独』が6月に文庫化されたことでも話題になっているガルシア＝マルケス。『エレンディア』は手軽に彼の魅力を味わえる中短編集だ。奇想天外な出来事を語りつつも、語り口は淡々として、現実を語るかのようである。

評者のお気に入りには「この世でいちばん美しい水死人」。ある村に、よそ者の男の水死体が流れ着く。死体の美しさに掻き立てられる村人たちの空想は、水葬の後も村に影響を与えていく。冷たい水死体が引き起こす、温かな物語。

唯一の中編であり、映画化もされている「無垢なエレンディアと無情な祖母の信じがたい悲惨の物語」にも言及しておきたい。砂漠の広い屋敷で実の祖母と2人で暮らすエレンディアは使用人のようにこき使われていた。しかし、ある風の強い日に燭台が倒れ、屋敷をすっかり燃やしてしまったことから、2人は外界へ出ていくことを余儀なくされる。外の世界でも祖母は彼女に身売りをさせ、相変わらずこき使すが、彼女は純真さを保つ傍らで少しずつ環境は変化していく。そして、彼女に恋をした男がその境遇を変えるのだが……幻想的なラストシーンが印象に残る。

ガルシア＝マルケスの作品に見られる、驚異の語り口はしばしば「マジック・リアリズム」と呼ばれる。時に現代的な内容を語りつつも、空想を現実と混ぜ合わせ、淡々と語る彼の短編は、民話のように、素朴でありつつも力強く心を打つ物語の力を感じさせる。

(荒砥)

(208頁 税込638円)



『人間喜劇』総序・金色の眼の娘

バルザック著、西川祐子訳
岩波文庫

今回の特集は千円以内の絶品本。それにぴったりなのがこの本、バルザックの『人間喜劇』総序・金色の目の女』だ。「人間喜劇」とは何か？——それは世界のすべてを小説で呑み込もうとする、尽きることのない欲望の大それた試みである。

作者バルザックはこの総題のもと、没するまでに91編の小説を書き残した。貴族から貧民まで、詐欺師から聖人までのあらゆる人々を、異なる作品において同じ人物を再登場させる手法（バルザックの偉大な発明だ）で描いた作品群のうち、本書に含まれるのはマニフェストたる「総序」と、中編小説「金色の眼の娘」の二つだ。前者においてはバルザックの壮大な構想と、人間というものを捉える原理が明かされる。そして後者ではその実践編として、色男ド・マルセーと謎の美女の間の情熱的なロマンス、そして血筋にまつわる愛憎劇が語られており、つまり、バラバラに読んでも強烈に面白い。

しかしなぜ、訳者はこれらを「抱き合わせ」でこのたび訳出したのか？これがまさに慧眼というものだろう。「金色の眼の娘」はx軸にロマンス、y軸に血縁という平面の上に歴史と地理のz軸までもを有しており、中編ながらまさに、時代と社会を縦横に描き出す「人間喜劇」の箱庭的代表例といえるのだ。そして冒頭に据えられた舞台設定のくだりは、原理（『総序』）と具体例（小説）との間をスムーズに橋渡ししてくれる。

「人間喜劇」の巨大な世界に踏み出すのにこれほど適した本もまたとあるまい。お値段なんと1001円（税込）。1円の誤差は大目に見てもらおうか。

(コーク)

(312頁 税込1001円)



いま集合的無意識を、

神林長平著
ハヤカワ文庫JA

SFで何が書けるか。何だって書けると、本書は答える。SFで何を書くべきか。その答えも、本書に刻まれている。ミタリ、ミステリー、ジュブナイル、冒険活劇、作家論。無限のSFの可能性を示す短編が6本、そして珠玉の解説が2本収められている。



SFと言えば突飛な世界設定に目を向けがちだが、神林長平は、その突飛な世界に生きる人間が我々どう異なるのか、を描いているように思う。本書の作品はどれも地の文が一人称視点で綴られている。虚構世界を生きる人間が抱く感情、価値観、思考が主観的立場から描かれ、フィクションとしてのリアリティが高まり、虚構が現前する。読者はそこに生きる人々に共感を覚えつつも、決定的にズレている点に興味を惹かれる。古い作品の中には、かつてはズレていた価値観が今や共感しやすいものになっているものもあり、神林長平の鋭い洞察と先見性が見られる。神林長平は未来の可能性としてのフィクションを提示し、その世界を生きる人間を描くことで、読者に未来への応答を要請しているのだろう。

特に印象的なのは、画面上に現れた伊藤計画を名乗る文字列と神林長平が自ら対峙する表題作。伊藤計画の作品を下地に、意識、リアル、フィクションの関係が論じられる。本作はフィクション論を介した伊藤計画への私的な追悼文であると同時に、大震災という現実へ立ち向かうSF作家やSF読者への開かれた決意表明となっている。両極端なこれら二つの側面を両立させていること自体が神林長平のフィクション論の強固さを裏付けている。

「ヒトはフィクションなしでは生きていけないんだ」。神林長平はそう断言した。(茂)

(256頁 税込682円)

深夜特急1

—香港・マカオ—

沢木耕太郎著 新潮文庫

バックパッカーにとっての教科書、あるいはパイブルと呼ばれる『深夜特急』シリーズ。新潮文庫から出版されている文庫版は全6冊で構成されており、香港からマレー半島、インド亜大陸、シルクロード、そして地中海を経由したロンドンまでの陸路での旅路がそれぞれの巻で地域ごとに描かれている。



初めて本シリーズが出版されたのは38年前である。しかし、今でもなお新装版として登場することを考えると、非常に長い間人々から愛されている「旅行記の古典」であると言える。何故こんなにも長い間愛されるのか。他の旅行記と何が違うのか。手に取るまでそんな疑問を持ち続けてきた。書評としては失格かもしれないが、読了後も明確に説明することはできない。一つ確実に言えることは、著者の体験が、やけに瑞々しく鮮明に感じた、ということである。古い白黒写真に、徐々に色がついていくような感覚。言語がしにくい感覚が、クセになるのかもしれない。

著者の旅路は40年程前に行われたため、同じ場所に行っても今では見ることでできない景色も多い。お金のレートも違い、現在と地名が異なる場所すら存在する。そんな中で、おそらく変わっていないであろう人とのつながりに、心惹かれるのかもしれない。もちろん、良い人との出会いばかりではない。そんな中でも他の旅行者や現地の人々と行動を共にすることにより、筆者が感じたことをありありと追体験できる。

1食分の値段で、約40年前のバックパッカーの世界半周旅行が追体験できる。文字を媒介した手軽な「海外旅行」をしてみたいかがだろうか。

(ブラチ)

(272頁 税込693円)

みみずくは黄昏に飛びたつ

川上未映子／村上春樹著
新潮文庫

川上未映子が訊き、村上春樹が語る。現代日本を代表する作家二人による夢のようなインタビュー集——それが本書だ。小説はどう書けば、比喻はどう使えば、文体はどう練り上げれば……。作家を目指す者なら誰しも一度は抱くであろうこれらの問いに、村上春樹があーでもないこーでもないと答えてくれる。その面白さは、村上の言葉を引用すればわかるはずだ。



まずは「書き直し」について。「ボイスをどういうふうにして作るか」というと、結局は『書き直し』なんですよ。最初まずひととおり書いておいて、それを何度も何度も書き直して、磨いて行って、ほとんどこのまま永遠に手を入れ続けるんじゃないかと心配になるくらい手を入れていくうちに、だんだん自分のリズムというか、うまく響き合うボイスになっていくんです。

次に「解釈」について。「頭で解釈できるようなものは書いたってしょうがないじゃないですか。物語というのは、解釈できないからこそ物語になるんであって、これはこういう意味があると思う、って作者がいちいちパッケージをほどこいていたら、そんなの面白くも何ともない。読者はガッカリしちゃういます。作者にもよくわかっていないからこそ、読者一人ひとりの中で意味が自由に膨らんでいくんだと僕はいつも思っている」。

どちらの言葉も長い作家生活から出てきたもの。だからこそ否定しがたい説得力を持つ。そして忘れるなかれ、これらの言葉は、村上春樹の長年のファン・川上未映子が聞き手だったからこそ引き出せたもの。川上と村上の相性抜群コンビによる楽しい言葉のやり取りには、創作のヒントがたくさん詰まっている。(ばや)

(480頁 税込 825円)

なかなか暮れない夏の夕暮れ

江國香織著
ハルキ文庫

窓を閉め切って冷房を効かせた部屋は、読書に適している。蝉の声は遠のき、暑さも忘れて、小説の世界へ意識が溶け込む。極寒の雪山にだって行ける。本書の主人公、稔のように。



ふいに物音がする。「本から顔をあげる。随分とあかるい。まるで夏のようなだ」と稔の意識は現実に戻り切らない。作中の季節は、正真正銘、夏である。

稔は一人暮らしの50歳。代々続く資産家の一族であり、悠々自適に気ままな日々を送っている。元恋人と暮らす娘の波十と会ったり、ドイツに住む姉の雀とスカイプをしたり、そしてたいていは本を読んでいる。寝椅子で、寝室で、バスタブの中で……。彼の生活は現実世界と小説の世界を行ったり来たりしてその境界はときに曖昧だ。

本書の魅力の一つに、その構成を挙げたい。なんと、小説の中で読まれている小説が読める。稔が生活の合間に少しずつ読み進める小説を、我々読者も同じように読むことができるのだ。同じようにというのはつまり、インターホンが鳴れば物語は一旦途切れ、日々の暮らしが進むとともに小説もまた読み進められるということだ。江國香織の美しい筆致で書かれるメインストーリーのみならず、作中作の北欧ミステリやカリブ海のロマンスも、というように1冊の本で様々な文体を味わえるのが贅沢なところである。

大事件は起こらない。しかし登場人物たちが持つどこか浮世離れた空気は非日常を、「読書」を感じる。1000円でお釣りがくる本書。そのお釣りで稔が食べていたソフトクリームを買いに行ける。非日常の延長だ。なんせ、まだ日は暮れないのだから。(ひるね)

(384頁 税込 770円)

新刊コーナー

あらゆることは今起る

柴崎友香著
医学書院

ランダムな思考が止まらない、常に眠い、遅刻が多い、片付けができない。同様の症状を抱えている家族や友人のことが思いつく。彼らのことを分かっていたつもりだったが、本当の意味では分かっていたのかもしれない。本書を読んで、彼らの世界を少しだけ知ることができた気がした。

著者は芥川賞受賞作家。ADHDの診断を機に、ADHDや発達障害にまつわる自らの経験や思考を綴ったエッセイ集が本書だ。発達障害にまつわる本は失敗談とその対策、といった構成になりがちだ。本書も冒頭に述べたような困りごとが紹介されるが、具体的な経験や思考の過程、世界の捉え方に力点が置かれている。「思いついたあれもこれもが洗濯機のように回り、身体は一步も動けない」「三十七年間ずっと眠たかった」「私の脳は、励ましの歌を歌ってくれへんのやわ」。平易な

語りに加え、連想ゲームのように話題があつちへこつちへ無軌道に進む展開は、目の前で昔話を聞かせてくれるような心地よさがある。本書の根底にあるのは「私は「この私」を通じてしか世界を経験できない」という前提だ。この前提は正しいのだろう。表題が意味する（恐らく稀有な）時間感覚、体内に複数併存する時間の上を「今」が漂っている感覚。評者はそれを経験することができない。しかし、知ることとはできた。本書をきっかけに経験しえない他者の世界を、苦しみを、知る人が増えてくれることを願っている。（篠）

（三〇四頁 税込二二〇〇円 5月刊）

センスの哲学

千葉雅也著
文藝春秋

「あの人センスいいよね」と言われたい……！——そんな俗な思いから本書

を手にとった。読み終えた今、センスが良くなったかどうかは正直わからない。しかし少なくとも、絵画、音楽、小説、何であれ、これまで自分が「いい」と思ったものを自分は

なぜ「いい」と思えたのか、それを説明するための言葉は得たように思う。物の面白さはどこにあるのか、物を見るとき私たちはどこをどう見ればいいのか、それを本書は教えてくれる。キーワードは「リズム」だ。

リズムは「規則と逸脱」から成る。同じ刺激が繰り返されるなか、そこにとまわり違うタイプの刺激が入ってくる。ドラマであれば、8ビートが規則的に鳴り響くなか、ときおりフィルインが入られる。スタンドライトであれば、フラットとしたフォルムがときおりクネツと曲がったりガクツと折れたりする。このいわば「凸と凹」の並び方の妙、そこに意識を向けられることが「センス」であると著者は言う。物の面白さもここにある。

絵画が目の前にあるとしよう。そのときまずすべきことは、個々の部分にひそむリズムに目を凝らすことであって、「これは何を言いたいのか」とその全体の意味を問うことではない。物事をリズムとして「脱意味的」に楽しむこと、それがセンスへの目覚めの第一歩なのだ。試しにこれまで自分が「いい」と思ったものを思い出してみてほしい。するとそこにリズムがあったことに気づくはずだ。

こうして本書は、物の新たな見方——センス——を私たちに授けてくれる。（はや）

（二五六頁 税込一七六〇円 4月刊）

ブローケン・ブリテンに聞け 社会政治時評クロニクル 2018-2023 ブレイディみかこ著 講談社文庫



英国・ブライトン
を舞台に、中学生の
息子と母である自身
との日々を瑞々しく

描いた傑作エッセイ『ほくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』。その著者であるブレイディみかこは、保育士として働きながらトラックドライバーの夫と公営住宅に暮らしている。生粋の労働者階級である彼女が様々な媒体に寄稿した、英国のいまに切り込む時事エッセイをまとめたのが本書である。

本書のもととなる連載が始まった二〇一八年は、二〇二〇年のEU離脱に向け、具体的な条件で採めに採めている時期だった。やがてコロナ禍が到来し、エリザベス女王が死去する。こうした英国の激しい情勢の変化は、速く離れた日本にも伝わってくるほどだ。

そんななかブレイディが光を当てるのは、時事問題に対する身近な人びとの反応や、ドラマや映画から見える小さな流行の変化だ。経済格差が深刻化し、貧困層に食材を提供するフードバンクが増加していること。コロナ

禍によりキーマーカーの低賃金労働が浮き彫りになり、ストが多発していること。EU離脱と残留という新たな対立軸が生じていること。ローカルな声を拾い上げること、日本からは見えない社会の変化が鮮明になる。

サッチャー期からの緊縮財政は経済格差を拡大した。「なにかが壊れている」ことに英国社会も気づいている。この書評を書く間に労働党が一年ぶりに政権を奪取した。

暗い時代でもブレイディは筆を執り、ぼやきながらも書く。地べたから声を上げる。そこにこそ、彼女の真骨頂がある。(たいやき)

(三二六八頁 税込八九一元 3月刊)

ほんとうのことは誰にも 言いたくない

ヤマシタトモコ／山本文子著
フィルムアート社



『違国日記』『花井
沢町公民館便り』
『HER』。彼女の作
品は多くの読者の心

を掴み、救ってきた。先月号に引き続き、漫画家・ヤマシタトモコの世界に迫る一冊を。本書は、彼女の漫画とともに歩んできた人生をまるっと堪能できるインタビュー本(な

んと全て語り下ろし)。幼少期の創作の記憶、影響を受けた作品、出自でもあるBL作品への愛、社会への違和感、そして『違国日記』に込めた思いまで——ファン垂涎の贅沢な一冊だ。さらにセリフとコマ割りの演劇性、人物造形へのこだわりなど、職業漫画家としての語りも満載で漫画好きには堪らない。

さて、BLにSF、ダンス、はたまたホラー。彩り豊かな作品を述べ懐しつつ彼女が語るのは、そこに通底する物語への願いだ。

その一、ネガティブな感情の肯定。欲望も暴力も絶望も、成熟の養分なんて笑い飛ばせばやしないけれど、人生にはどうしたってあるものだ。彼女はその存在を消去せず、物語として紡ぎ出す。その二、ディスコミュニケーションとつながりの群像劇。彼女は分かり合えなさを丁寧に、穏やかに描く。愛という感情は、恋や家族といった狭い檻の中で解決されなくてもいい。たとえこの世にまだ名前がなかつたって、目の前の人間と築き、広がり、変化していくこの関係性がそが希望なのだ。

『ほんとうのことは誰にも言いたくない』かもしれない。私だけの傷、苦しみ、孤独がある。「でも、自分だけじゃないと知ること、何かの力になることもあると知っているから、それは描いていきたいんです。」(浅煎り)

(三二八二頁 税込二九八〇円 6月刊)

ほら話とほんとうの話、 ほんの十ほど「新装版」

アラスター・グレイ著
高橋和久訳 白水社



「わたしは目が覚めた。そしてそれが夢だったことを知った、すべてが、というわけではないが」

本書は、年初に映画が公開された『哀れなるものたち』の原作者でもあるアラスター・グレイによる短編集。寓話やSF、コメディから恋まで、多様なジャンルの短編が収録された本書は、訳者も述べるように、さながら「グレイを味わうための前菜盛り合わせ」だ。「家路に向かって」は三〇歳になる男と彼の昔の女、そして今の女の口論を描いたコメディ。糾弾する女とやられっぱなしの男の様子は喜劇と言っ他ないが、彼らの言葉の端々ににじみ出る感情の機微は、ひどく現実的なものを感じさせる。

「時間旅行」では、語り手が眠っている間に足の指の間にはさまったチューインガムの起源を、代数とユークリッド幾何とペーコン的な帰納法を用いて解いていく。ラストシーンではチューインガムの謎、それとともに明

かされる事実、タイトルの意味が交錯する。エピソードの「ミスター・ミークル」は著者の中等学校時代の恩師を語る自伝的短編である。著者が執筆をするようになった経緯、物書きになってからの恩師との交流、いつの間にか語りは空想的になり、著者は目を覚まし、冒頭の引用へと続く。

本書で描き出されるのは空想的なリアル、リアルな空想。物語を読み終わった後の感覚は目覚めにも似ている。本を読むことは、夢を見ることと同じかもしれない。もちろん、すべてが、というわけではないが。(荒砥)

(二二八頁 税込二八六〇円 5月刊)

失われたものたちの国

ジョン・コナリー著
田内志文訳
東京創元社



「行きて帰りし物語はファンタジーの王道だ。少年少女たちはここでではない

どこかで困難に立ち向かい、元の世界への帰還を目指す。大人になった今でもファンタジーが好きた。でもどこかで、ファンタジーは子どもの特権だとも思っていた。本書も伝統

的な「行きて帰りし物語」の一つ。だが、異世界を冒険するのは、三三歳の大人の女性だ。主人公・セレスには八歳の娘がいる。母娘二人、満ち足りた生活を送っていたある日、娘は交通事故で昏睡状態となってしまった。セレスは毎日病室に通って、目を覚まさない

いつ死んでしまうともわからない娘の看病を続ける。心身ともに限界を迎えようとしていた頃、彼女は『失われたものたちの本』という一冊の本——そう、ご存じの方もいるだろう、同著者による実在する物語——と出会った。本の中では母を亡くしたデイウィッド少年が、おとぎ話の登場人物たちが織りなす異世界に迷い込む。夢中で読み進めたセレスは、突然見知らぬ場所に迷い込んだとき、そこがあの本の世界だとすぐにわかった。一刻も早く娘の眠る元の世界へ戻らなくては、と。

逃げ出したい現実があるのは大人も子どもと変わらない。ただ、大人には大人の異世界の歩き方があるようだ。こうしている間にも娘は死んでしまつかもしれない。それでもセレスは、立ち寄った村で子どもが攫われたら、その子の親を思っ探しに行く。

使いたくなかった短剣も子どものためなら殺意を持って振ることが出来る。そんな彼女が書くこの「続編」の結末やいかに。(ひるね)

(五一〇頁 税込二九七〇円 6月刊)

飛ぶ男

安部公房著
新潮文庫

空中浮遊。透明人間。誰もが一度は夢見る超能力が、もし、現実存在したら？

S・F・前衛芸術作家として知られる安部公房の幻の遺作が文庫化された。ある夏の明け方、時速二、三キロで滑空する人型の物体が出現した。目撃者は男性不信の女・小文字並子、冴えない中学教師・保根治……《飛ぶ男》を巡って、奇妙な人間関係が動き出す。

由に浮かびながら携帯電話で保根に呼びかける《飛ぶ男》。彼を空気銃で狙撃する小文字。不条理で奇想天外な安部公房の作品世界はさながら出鱈目なコラージュか、眠りの浅いときに見る夢のよう。しかし細部に宿る妙なりアリティが、読者の平衡感覚を失わせる。同時収録されている「さまさまな父」は、「飛ぶ男」本編では明かされなかった構想が見え隠れする作品。主人公の父は悪用しようとして「透明になれる薬」を服用するが、ファンタジーのように一筋縄ではいかない。透明になるのは本当に体だけで、衣服も時計も、奥

歯の金冠すら身につけられない。体内に取り込んだ食物が消化される様子まで、透明な人体模型のように丸見えだ。そんな透明人間と一つ屋根の下で暮らすのは、想像以上に気味が悪い。描写のひとつひとつに、心臓の裏をくすぐられるようなりアリティがある。

安部公房は今年で生誕一〇〇年を迎える。新潮文庫では「飛ぶ男」に加え初期短編集が刊行。既刊の電子書籍も解禁された。八月下旬には代表作「箱男」が石井岳龍監督によって映画化される。この機会に、未完の大作を味わうのはいかがだろうか。(くたくた)

(二〇八頁 税込六四九円 3月刊)

ニューヨーク・ストーリーリーズ
ルー・リード詩集ルー・リード著、梅沢葉子訳
河出書房新社

ルー・リード。ミュージシャンであり詩人。彼の名は聞いたことがない人が多いかもしれない。しかし、アンディ・ウォーホルの手になる、あの、黄色いバナナのレコードジャケットは？ 脳裏に浮かぶ人が多いのではないだろうか。

そう、彼ルー・リードはあのレコードのバンド、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドのリードボーカルだ。その彼がバンド解散後の長きにわたるソロ活動時に書いたものも含め、厳選した詩集が本書、『ニューヨーク・ストーリー』である。詩集なのにストーリー(物語)。ふとすると見逃してしまいがちな齷齪だが、このずれにこそ彼の本領がある。

代表曲とされる『Walk on the Wild Side』を見てみよう。一人目の登場人物、ホリーはマイアミから出てくる。アメリカをヒッチハイクで横断する彼女は「眉毛を抜きながら／スネ毛を剃ったら 女になった／坊や、冒険しなさい」と言って、彼女はニューヨークの雑踏へ——この歌には有名無名を合わせて五人もの人物が登場するのだ——姿を消す。これも、超クールに。そう、ルー・リードが描くのは「あなた」一人に歌うラブソングではなく、顔と名前を持った、人物(実在のこと)も、そうでないこともある)の肖像、彼(彼女)らの人生の一コマなのだ。詩でありながらストーリーでもある、奇妙な世界。

そんな彼の詩は、是非とも原曲を探し出して、音と合わせて聴いてほしい。彼の声と彼のギター、これらが詩と合わさったときに世界が完成する。

(四一〇頁 税込三三三〇円 4月刊)

被災者発の復興論

3・11以後の当事者排除を
超えて

山下祐介／横山智樹編 岩波書店



今年の元日、石川能登を最大震度七の揺れが襲った。あの張り詰めた空気が、人の死の生々しさはまだ脳裏にとびり付いている。この社会は災害と無縁ではいられないらしい。——3・11から三年が経った今、改めて東北が辿った復興の帰結を確かめてみたい。著者らは明言する。それは失敗だったと。

東北の復興は「誰もいない」「空っぽの当事者」や、空っぽの防災や復興のために、そこに今住んでる人の暮らしに必要なもの、暮らしそのものや地域そのものを奪って来た。被災当事者たちは、他ならぬ復興の主体から排除され続けている。

なぜこのような失敗が生じたのか。本書は復興における当事者排除のメカニズムについて、被災当事者が丹念に問い直してきた思索の記録である。地震、原発、風評をめぐる被害／加害——「当事者」とは複雑な位相を幾重に孕む言葉だ。しかし、国が突きつける復興計画は、その複雑さを一把一絡げにまとめ

上げる。従順でしおらしい「当事者」像にそぐわない声は不可視化され、目的と主体を欠いた空虚な事業だけが加速していく。

安易な理解を拒む本だと思う。それは「当事者」という言葉の複雑さが、慎重に用いられているから。けれど、複雑さは曖昧さの許容を意味しない。本書が紡ぐのは、グレーにごまかされた「当事者」理解は、復興から主体を奪い取るという敵然たる事実だ。

一三年の月日を経れどなお、決して忘れてはならない痛みと声。その反省を未来に繋ぐために必要な一冊。

(二六四頁 税込二六八〇円 3月刊)
(浅煎り)

世界目録をつくらうとした男
奇才ポール・オートレと情報化時代の誕生

アレックス・ライト著
鈴木和博訳 みすず書房



国際十進分類法。図書分類法のひとつで、数字を連結することで主題を細かく整理できることに特徴がある。本書はその考案者のひとり、ベルギーの起業家ポール・オートレ(一八六八〜一九四四)の伝記だ。彼は二〇世紀前半の目まぐるしい時代の中、膨大

な情報を索引システムによって秩序立てることで統合し、世界をひとつにすることを夢見ていた。いつでも、どこでも、誰でもアクセス可能な巨大図書館。それは人類全体の知性を底上げし、やがては世界平和に繋がる……。けれどもその夢は実現することなく、ベルギーは二つの世界大戦に巻き込まれてゆく。

インターネットといういつでも、どこでも、誰でもアクセス可能な巨大図書館が、けれども世界平和をもたらさないことを知ってしまった二一世紀のわたしの目には、人類の知性に懸けるオートレの情熱はひどく切ないものとして映る。誰でも使えるはずの索引システムが細かく整理されすぎてかえって複雑になってしまったこと、構想された学問のユートピアが知識の独占と管理に転じかねないこと。そんなふうなオートレの夢は空回りして、時代の波にかき消されてゆく。では、オートレは間違っていたのだろうか？ そう言い切れるほど、現代の人類は賢くなっただろうか？

あり得たかもしれないもうひとつのインターネットを想像させるオートレの夢は、知識のあり方、その未来について、わたしたちに改めて考えさせる。これは考え続ける価値のある問いだ。少なくともオートレは、決して諦めなかったのだから。

(四一六頁 税込四九五〇円 6月刊)
(水炊き)

西洋哲学史入門

古代ギリシアからルネサンスまで

手塚也 鶴巻 山内 伊藤 齋藤 編 日本文学

インタビュー形式の哲学史入門書!! 「聞き書き式」とはまさに本邦初である。編者である齋藤が読者の目線から率直な疑問を投げかけると、研究者が難解な概念を噛み砕きつつそれに答えてくれる。読者を置き去りにすることなく、思考の渦に巻き込んでいく——彼らの対話にはそんな力が宿っている。

シリーズ三巻の始まりとなる本書は、古代ギリシア哲学はもちろんのこと、コンパクトな入門書ではなわざりにされがちな中世哲学、そして一四〜一六世紀のルネサンス思想をも照射する。ソフィストって何者? 「唯名論」が生まれたのはなぜ? ルネサンス思想の人間観って? こうした問いに対する真摯な回答には、現代社会が抱える問題との関連や、目下の研究課題の提示も含まれる。齋藤は言う、「哲学史はいまなお格闘中の問題がごろごろと転がっている生ものだ」と。

第一巻に続けて、続刊の著者もまた実に豪華な顔ぶれである。全巻を読み切り、常に変化し続ける「哲学史の現場」の一端を味わってみては。

(二七二頁 税込二一〇〇円 4月刊) (はらた)

文章は「形」から読む

ことばの魔術と出会うために

阿部公彦著 集英社新書

文章は、ことばの意味だけから成り立っているわけではない。契約書には宣言調で丁寧い「形」が、料理本にはニコニコしたような「形」が備わり、それが読者に作用している。そんな「形」から、文章の効果や書き手の意図を次々に分析していくのが本書である。

著者の手つきは非常に大胆だ。よくあるカフェの注意書きをいじって詩の形式にしてみよう、という章などは、その取り組みが詩の「形」を茶化すパロディのようにも見え、読むのになかなか勇気が要るほどであった。

本書は著者の論の「実践編」であり、解説よりデモンストレーションの比重が大きい。よって、より深く理解したい読者は彼の他の著書にもあたるのが良さそうだ。こうした構成が取られているのは、本書の肝が、国語科学習指導要領改訂への問題提起だからだろう。彼によれば、論理的・実用的な文章を読むためにも、「形」への着目は必要。しかし、その力を育ててくれる文学作品の読解が、役に立たないものとみなされつつあるというのだ。斬新で、かつ重要な指摘である。

(三二二頁 税込二一四四円 3月刊) (朝露)

刑の重さは何で決まるのか

高橋則夫著

ちくまブリマー新書

分かりやすく書かれた刑法の入門書……だが、タイトルのフランクさを一蹴するほど詳しくて濃い学術書である。それでも新書らしさがなくならないように描かれているのは、著者の手腕である。著者は、数々の刑法関連書籍を執筆している一方で、とっつきにくい刑法を一般的に噛み砕くことが上手いのだ。

序章から、刑法の役割や目的などの初歩的な情報や、国によって異なる考え方を取っている学説など、バラエティー豊かな説明が並んでいる。なかでも最も印象に残るのは、刑法は被害者のためには効果を発揮せず、予防効果しかない一方で、社会貢献を行っているということである。そして、社会コミュニティ内での法益保護と自由保障は、社会生活を営む上で重要であることも同時に理解できる。より詳しく刑法のことが知りたいと思った方、あるいは刑法総論の授業について行けずに焦っている法学部下回生の方は、著者編者の『授業中 刑法演習——われら考える、故にわれらあり』(信山社)も併せて手に取ってもらいたい。

(二〇一頁 税込九四六円 4月刊) (フナ)

漠然とした「哲学っぽい」問いに輪郭を

哲学とは「人生の意味」について考えるような学問だ、と思われがちな一方、多くの哲学者たちはそれを、厳密な哲学研究にそぐわないテーマとしてあしらってきた。『人生の意味の哲学入門』（春秋社）のまえがきに書かれたこの事実にも、驚く人も多いだろう。

しかしようやく、その風潮は変わりつつある。本書は「人生の意味」の分析哲学的研究を初学者向けに解説する、おそらく日本初の一冊だ。



人生の意味についての問いは、しばしば「悩み」である。人それぞれで正解がなく、議論し得ない問いにも見える。では、どうしたら哲学的に考えていくことができるのか？ 本書はこのような初歩的な問いから出発し、主要な研究史を概説しつつ、人生の意味の主観説と客観説、のような基礎的な立場の違いなどをわかりやすく示していく。後半はやや高度な内容もあるが、概して入門するにあたっての外堀を埋めてくれるのが本書だと言える。ただし本書は「人生の意味の哲学」という領域を論じるメタな視点が多く、「人生の意味」とはかくかくである、という正面からの主張には出会えない。熱意ある読者には少々物足りないだろう。

そこで次に紹介するのは、『生の有意味性の哲学』（晃洋書房）。

本書で著者が論じるのは、自分にどんな価値あることができるかを探りながら生を形成し実現していく活動に、人生の意味を見る論だ。このように一本の軸が通った研究書はやはり読み応え抜群！ ささらに、最前線で行いられる厳密な定義などに触れられる点も有意義だ。

そしてこの場で注目したいのは、研究の土台として解説される「Wittgensteinラダイム」である。これを本書に沿って正確に理解す

れば、人生の意味の哲学の重要性がはっきりわかるだろう。それは「人生の意味」を、他の価値には還元できない、「道徳」と「幸福」に次ぐ第三の価値とみなす枠組みである。

従来「善」の価値領域は道徳と幸福を軸に考えられてきた。人助けは道徳的に善い、スポーツでの爽快感は幸福に資する善いこと——見するとほとんどの「よいこと」がこの二つに分けられそうだ。しかしWittgensteinによれば、病気の兄弟を見舞うことや、子供のために徹夜してハロウィンのコスチュームを作ることなどは、道徳のためでも自分の幸福のためでもないが、価値がある。そして我々の生は、日常に満ち溢れているこの第三の価値によって、意味あるものとなっているのだ。にもかかわらず、哲学・倫理学はこの価値を捉え損ねてきた。だからこそ、今「人生の意味」が分析されるのである。

最後にもう一度視野を広げるために、『現代思想 特集Ⅱ人生の意味の哲学』（青土社）



へと移ろう。先ほどの一冊は「第三の価値」という側面を押し出し、議論の枠を厳密に定めて論じ尽くすものだったが、ここに来るとその景色は一変する。「意味」という言葉の示すところに注目して分析したり、実存主義との対比を論じたり、また医療現場など実社会との関連で考察したり……と、雑詠らしく多種多様で新鮮な観点が提示されるのだ。より自らの関心に近く、より自らの人生にとって意義深い論点を探し求める読者にとっては、本書が最良のガイドとなるだろう。

読者がどの道で思索するにせよ、それぞれの「人生の意味」の問いが、真剣で面白い、有意義なものとなれば幸いである。（朝露）

「暗闇を自分のものにする」

失われた暗闇

熱帯夜、あなたは眠れず散歩に出かける。数十メートル先まで道を照らす街灯の列。爛々と輝くコンビニやコインランドリー。立ち止まって晴れた夜空を見上げる。瞬く星のない夜空。気づいているだろうか、夜が明るすぎること。

世界に六〇〇種ほどもいる哺乳類の多くが、夜明けや黄昏の薄暗い時間帯を好む。昆虫や鳥を含めれば、暗闇を活動領域とする動物はもっと多い。彼らは人間の目では捉え切れない光の波長や磁場を頼りに狩りを行い、番を探す。彼らを導くのは月の発するほのかな光であって、人工の光ではない。人間が商売と安全のために灯す強い光は、自然の法則を乱し、生き物たちの〈眼〉を眩ませてしまう。『暗闇の効用』（太田出版）は、現代のこうした「光害」に警鐘を鳴らし、生態系にとっての暗闇の重要性を説く一冊だ。



著者ヨハン・エクレフは、スウェーデンのコウモリ学者であり、二〇年近く、夜を好む生物を観察してきた。蛾、ホタル、クロウタドリ、ウミガメ——人間とは異なる感知能力を持つ彼らの生に思いを馳せるようエクレフは呼びかける。「昆虫を救う方法よりも昆虫を殺す方法の研究のほうが多いことは、私たち人間の営みをよく物語っている」。「人間は夜に生きる動物を追いやりながら、昼を押し広げてきた」。その代償があまりに大きいことに私たちは気づかない。

嫌われた暗闇

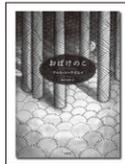
「苦難と闇、暗黒と苦悩、暗闇と追放」——神のいない生を語る『イザヤ書』の言葉である。暗闇は悪や無知の象徴として、忌み嫌

われてきた。だが、闇は人間の敵なのだろうか？ 科学的な考察の

傍で、エクレフは暗闇をめぐる思想史にも立ち寄る。北欧神話において、地上の休息期間として必要とされた冥界の闇。中国思想において、光とともに一つの総体をなす闇。そして、谷崎潤一郎が『陰翳礼讃』で評価したほどの暗さ。今こそ暗闇を尊ぶ先人たちの声に耳を傾けなければならぬ。「暗闇には、私たちの想像以上の発見がある。」「私たちは、暗闇とその静けさや繊細な美しさのなかで安心する。夜の闇のなかにも生命があるのだ」。

慰める暗闇

人間のそばには暗闇がある。それはこわいものではない、と教えてくれるのは一冊の絵本である。フィンランドのテルヒ・エーケボムが描く『おぼけのこ』(求龍堂)は、水墨画のような淡い陰影が織りなす絵に、わずかな言葉が添えられた絵本。「ここがきまずだらけになった」女性は暗い森のそばへ越してくる。その森には死者のたましいがいるという。そんな彼女のもとへある日、おぼけのこがやってくる。家を離れないおぼけのこに彼女は尋ねる。「どうしてひかりのなかへいかないの？」



「にんげんのことでもでいたいから。」
おぼけのこは、たましいが向かうはずのひかりのなかを指ささない。人間であるために、ひかりで満たされてしまっただけでなく、もう人間ではなくなってしまう。おぼけのこと共に、そして森の暗闇と共に女性はその傷を癒していく。

暗闇を、夜を、楽しもう。

(はらた)

編集後記

みなさんには、座右の銘はありますか？私は高校まで「好きこそもの上手なれ」という言葉を心に留めて生きていました。ところがどっこい、大学に入ると、好きでなくともやらねばならないことがいかに多いかを感じ知ります。「やりたい」ことではなく、「やらなければならない」ことに囲まれると自分の気持ちがわからなくなるのです。食べたいものすらわからなくなりました。

もちろん、好きではないことにもある程度我慢して取り組まなければなりません。ただし、〈ある程度〉。今したいことに躊躇せず打ち込める時間も必要ですから。人、花、スポーツ、本……。好き！と言えるものを増やしていくのは案外難しいことだと思います。それでも、綴葉に携わる時間は、私が好き！といえる貴重な時間の一つでした。

冒頭の問題に戻ると、近頃心に留めているのは「命短し恋せよ乙女」という言葉です。まあ乙女なんて歳ではないんですが、辛い時には倍賞千恵子さんの歌う『ゴンドラの唄』を聴いています。

最後になりましたが、読者の皆さんへお別れのご挨拶を申し上げます。今月号まで私の稚拙な文章にお付き合いいただき、本当にありがとうございました。(はらん)

当てよう！ 図書カード

今号の特集は「予算 1000 円絶品本」、千円札一枚で買える本を紹介しております。そういえば今月からは、新デザインの千円札が流通し始めましたね。その図柄に採用されているのは北里柴三郎ですが、彼が留学先で師事した、ある有名な細菌学者とは誰でしょう？

1. フレミング
2. コッホ
3. パスツール
4. レフラー

(水炊き)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から 5 名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは 9 月 15 日です。



《5月号の解答》 5月号の問題の正解は、4. の松本隆でした。代表曲は「風をあつめて」「木綿のハンカチーフ」「赤いスイートピー」など……日本の歌謡曲の歴史そのものと言えるでしょう。さて、図書カードの当選者は、ムニエルさん、レヂデントさん、さだのぶさん、えび天天さん、うにさんの 5 名です。当選おめでとうございます。

(浅煎り)

読者がらひひひ

○音楽小説をテーマに取り上げてほしい！
『蜜蜂と遠雷』や『革命前夜』など

(理学部・えび天天)

○日本文学、古典ものとか取り上げてほしい
平家物語とか源氏とか……あまりないように思います。
(天ノヲそば大盛り)

——食欲をそそる PN が素敵なお二方からのご要望です。夏にぴったりですね。弊誌の裏事情を申し上げますと、毎月の特集は半年ごとに編集委員で案を出し合って決めております。「音楽」も「古典」は毎回惜しいところまで票を集めるのですが、悲しいかな、勝ち残りはないテーマです。音楽を愛する私としては悔しい限り……。どうか音楽の特集を展開できないか画策している次第です。

また、新刊を紹介する枠が多い『綴葉』では、日本の古典が手薄になりがちなのも事実。個人的には『伊勢物語』の在原業平が大好きなのですが……と、ここでその愛を語るには紙幅が足りませんね。またの機会をお楽しみに。とはいえ、最近では近代日本文学を専門とする編集委員も加わり、『綴葉』の顔ぶれも移ろいつつあります。後期の『綴葉』の選書がどうなるのか、乞うご期待。(浅煎り)